

A-2 学校研究に基づいた算数科における授業の方向性

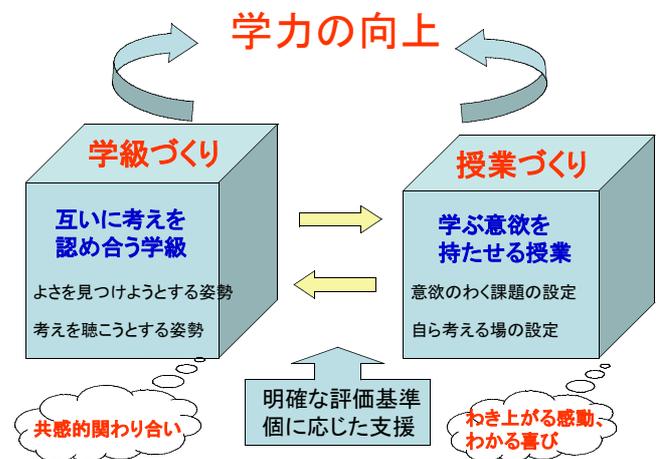
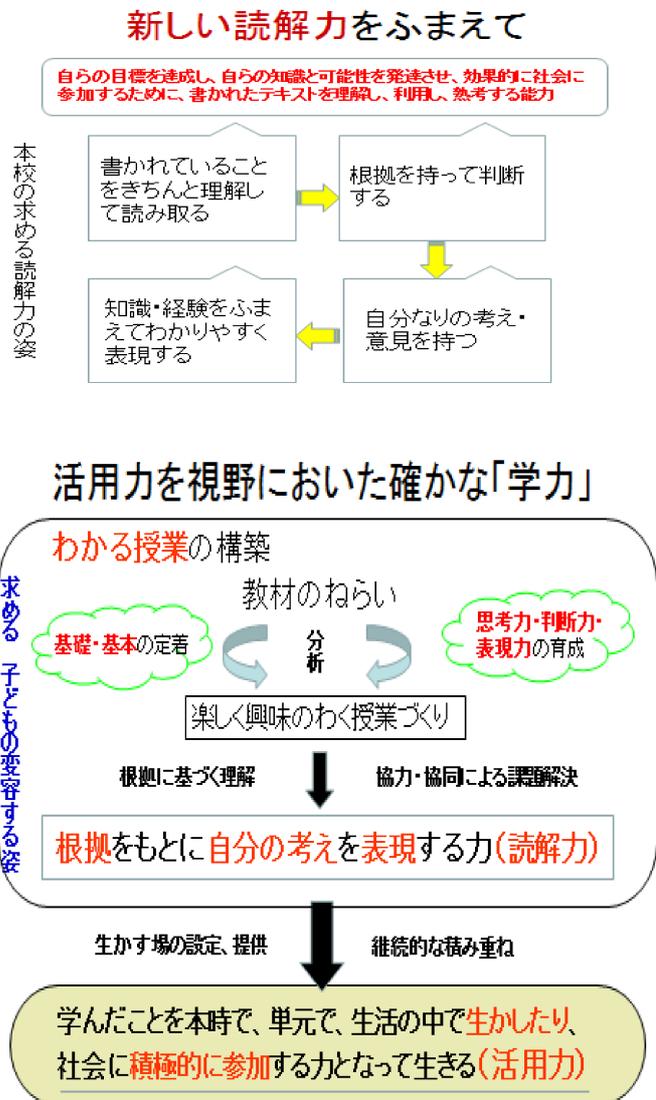
(1) 新学習指導要領の「活用する力」を視野においた確かな学力の向上

基礎的・基本的な知識・技能のさらなる定着と共に、思考力・判断力そしてそれを的確に表す表現力を身に付けさせてくことが重要視されてくる。その際、従来の要素に新しい「読解力」の観点を加えた力が求められてくる。

この「読解力」を、本校では右図のように捉えることとする。実感のわく「わかる授業」を築き上げるためには、児童の「私は、～と思います。」という言葉で終わらせるのではなく、「なぜ、そのように思ったのか」という根拠を示すことができることによって、より深い理解につながるものとする。従って、常に根拠を持ちながら考える姿勢を身に付けさせ、その根拠をもとに自分の考えを表現する姿、すなわち「読解力」を授業の土台に置いて進めていくこととする。思考し、判断し、表現する場面を日々の授業の中で意識して設定し、じゅうぶんな時間を提供（保障）していく。この毎時の継続的な積み重ねこそが「活用する力」を育てていくことにつながっていくと考える。

一人一人が「豊かな表現力」を身に付けるには、個の強さももちろん必要であるが、みんなで協力・協同して課題に取り組もうとする雰囲気作りや心の育ちも大切に培っていかねばならないと考える。自ら考えたくなり学びたいという意欲を持たせる授業づくりの側面と共に、互いによさを認め合おうとする学級づくりの側面の両面からのアプローチで、確かな学力が向上していくものと捉えている。そこには、明確な評価基準や個に応じた的確な支援も重要な要素となってくる。

このような研究主題をふまえ、算数科における授業の在り方について考え、児童が授業に算数的価値を見い出し、実感できるような学びを目指していく。



(2) 算数科における授業の方向性

実感のあるわかる授業

自らの思いを表出しあえる

学級づくり

つまずきを共有し、個の不安を解消する
「生わかり」を防ぐ

- ・「根拠」の問いかけ→「理由づけ」の習慣化
- ・個の考えの、明確な位置づけ
- ・コミュニケーション力(表現力)の向上
聴き取る→書く→伝え合う
児童同士の教え合う姿の育成

自発的な活動を促す

授業づくり

確実にねらいへと到達させる

- ・既習の掘り起こしを意図した必然性のある課題の工夫
- ・目的に応じた情報・資料の活用
- ・「算数的活動」の導入と定着

個のよさや可能性を伸ばす

支援と評価

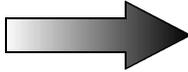
- ・キーワードによる共通認識
(考える視点の明確化)
- ・個に応じた補助教材の開発・工夫
- ・スモールステップでの確認・評価
(つまずきの察知と迅速な対応)

「算数的活動」重視、表現力向上

知識・技能

「習得」

「わかった! できた!」



算数的価値

思考力・判断力・表現力

『活用』

「～にも使えて楽しい!」

本時で

次時で

単元終了後で

関連単元で

どんなこと(既習事項)を?

どんな場で?

何に対して?

どのように活用する?

明確に!

教科を越えて(他教科の中で)

日常生活の中で

『進んで生活や学習に活用する』

新学習指導要領より